

# 村の生産数量目標は

## 平成24年度産米の生産調整

**66.30t**  
の減

国では、農業者や農業者団体、行政が適切に連携して生産数量目標の達成に向けて取り組むとともに、水田の有効活用により自給率向上を図るため、主食用米の需要拡大、米粉用米や飼料用米等の生産と利用の拡大に取り組むこととしています。

また、村では平成二十四年度も生産者の自主的な取り組みを基本に、水田を活用した産地づくりによる農業所得の向上など、安定した農業収入が図れるよう、関係機関と協力し推進します。



### 新潟県の生産数量目標

国は昨年十二月、平成二十四年度産米の生産数量目標と都道府県別の配分数量を示しました。全体数量は前年より二万ト少ない七百九十三万トに設定されました。

新潟県には、五十四万八千五百八十トが配分され、昨年より二百トの増加となりました。（面積換算にすると十萬千七百八十ト）

また、全国に占めるシェアは、昨年と変わらず六・九％のままとなっています。

### 関川村の生産数量目標

県では、二十三年度と同様「売れる米づくり」に努力してきた農業者や産地が報われるよう「需要実績」を基本に品質や地域の取組状況が反映

### 村へ配分された生産数量目標

区分	平成23年度配分	平成24年度配分	比較
米生産数量目標	4,817,690kg (80,294俵)	4,751,390kg (79,189俵)	66,300kgの減 (1,105俵の減)
面積換算値	937.29ha	929.82ha	7.47haの減

される算定方法を継続してまいります。  
村には、昨年と比較し六十六・三ト少ない四千七百五十一・三九トが配分されました。面積に換算すると、九百二十九・八二トとなり、昨年と比較し七・四七ト減少しました。

### 農業委員会会長に聞く



関川村農業委員会会長  
高橋 正さん(上土沢)

現在、村には水田面積のうち、三割を超える田で減反を強いられています。その農地をいかに有効活用して、収益の確保につなげていくかが課題だと考えています。

とにかく「売れる米づくり」と「品質の向上」に力を注いでいかなければなりません。将来的に村のブランド米として販売できたらと思います。

また、県（地域振興局）やJAの営農指導を受けながら、品質の向上を目指していかなければなりません。品質の向上に取り組みなければ今後さらに減反が増えることが予想されます。

村内の各地域においてさまざまな課題があると思いますが、積極的に意見を出し合っ村の農業を、そしてこの地域を一緒に守っていききたいと考えています。

## 水田農業の推進に向けて

### 《売れる米づくりの推進》

消費者に支持される高品質で安全・安心な米づくりを推進し、こしいぶき等のうるち米、酒米、もち米など、消費者や実需者のニーズに応える品揃えを図り、特色ある「売れる米づくり」の取り組みを推進します。

### 《コシヒカリ以外の品種の作付推進》

これまで以上に米生産を拡大していくためには多用な需要に対応できる米づくりが必要です。

また、営農の安定性・効率性の観点からもコシヒカリへの過度な作付集中を避け、品種構成の適正化を図っていくことが重要で、これまで同様コシヒカリ以外の品種の作付を推進していきます。

### 《水田における作物推進》

自給率及び農業所得の向上のため水田の有効利用を図り、地域の実情にあった作物による産地づくりを推進します。

## 《環境保全型農業の推進》

環境と調和した農業生産やエコファーマーの認定促進、環境保全型農業の担い手となる農業者育成を通じ、生産者・認定方針作成者、関係機関とともに地域ぐるみによる環境保全型農業の拡大を推進します。



## 品質向上への取り組み

平成二十二年産米は、記録的な猛暑により米の品質が大きな影響を受けました。村でも一等米比率が大幅に下落するなどの影響が出ました。品質と食味は、直接つながりはないものの、異常気象時でも対応できるよう栽培技術を習得し、品質向上への取り組みを進めていく必要があります。

## 耕作放棄地の解消に向けて

\* そもそも「耕作放棄地」とは・・・

耕作の目的に利用されていない農地で、今後も引き続き耕作が見込まれない農地のこと

国の統計では、平成2年以降から耕作放棄地は増え続け、平成22年までの20年間で約2倍の面積になったことが報告されています。

村も例外ではなく、猿害や担い手不足などが原因で山間地を中心に増え続ける傾向があります。

### 村の耕作放棄地は約420 a

村では、平成22年度に現地調査を実施した結果、村全体で約420 aの農地(畑)が耕作放棄地として確認できました。

村農業委員会ではこの結果をもとに農地の台帳を整理し、地域の担い手や新規就農者に対して、農地の貸し出しを行い、耕作放棄地解消の取り組みとして推進します。

関川村(JA出荷分)品種別一等米比率 (%)

	H19年産米	H20年産米	H21年産米	H22年産米	H23年産米
コシヒカリ	93.2	95.5	90.7	14.3	84.4
こしいぶき	67.5	89.6	78.7	20.2	88.4
ゆきの精	30.0	53.0	0.0	-	-
五百万石	34.2	90.0	83.7	7.7	92.6
こがねもち	60.9	63.3	71.0	5.6	51.7

村の稲作農家数および水稲作付面積

	H19	H20	H21	H22	H23
配分対象農業者数(人)	769	754	742	724	704
主食用水稲作付実面積(ha)	1,005.66	975.39	974.80	941.72	949.70

農林観光課「水田情報管理システム」より  
 ◀にいがた岩船農協より

## 認定農業者会会長に聞く



関川村認定農業者会会長 伊藤 宗吉 さん(上関)

今の農業は、コストがかかるうえ米価が安いなど、農家にとつては大変厳しい時代だと思えます。これからの農業は、集落営農や法人化というように、グループ化していかなければ時代の波にのついていけないのではないのでしょうか。法人化や集落営農などの取り組みについて引き続き村に進めていただきたいと思います。また、米づくりに関しては「安全・安心米」を目標に取り組んでいくことが大切です。そして「おいしい米」を作ることに。これが売れる米づくりにつながっていくものだと考えています。

これからは、とにかく楽しくて楽な農業をやっていきたいです。この村の農業を守っていくために、農家の方たちとお互いに助け合いながらやっていきたいと思います。